

平成30年度 第5回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成30年11月28日（水）

午後1時30分～3時30分

【会場】東伊豆町保健福祉センター 2階 多目的室

1 出席者

- ・ 発言者 東伊豆町及び河津町において様々な分野で活躍中の方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 100人

2 発言意見

番号	分野・所属	項目	頁
発言者 1	地域振興	空き家を活用したイベント企画	4
2	地域活動	総おどりの普及や食育活動	7
3	農業	地域での食農教育や防災協定の取組	10
4	農業	わさび農家としての取組	12
5	地域振興	伊豆稲取キンメマラソンの企画運営	17
6	子育て	地域における子育て支援活動	20
傍聴者 1	—	駿河湾フェリーの航路延長に関する要望	25
2	—	伊豆半島への企業誘致に際しての県の優遇措置	26

【川勝知事】 どうも皆様、こんにちは。この地域で広聴会をするのは、これで私自身はこの10年の間に3回目でございます。

特に今この地域に対して高い関心と期待がございまして、昨日から伊豆に入っております。昨日は朝一番5時起きをいたしまして、清水港から県道223号をフェリーに乗り、伊豆入りを果たしました。

土肥から国道136号線というのがありますね。あそこ今工事しております、すつと行けるように、大型のバスが交差しにくいところを改良する工事をずっとやってきたんですが、12月15日にはそこが開通するという事です。

それでずっとこちらの方に参りますと、天城北道路にぶつかる場所があります。そのところに下船原トンネルというのが200mほどですけれども、これが1月26日に開通すると。出たところが天城北道路。天城北道路は今国が一生懸命やってくださっております、それも1月26日に開通の記念式典をする、一緒にやると、こういうわけでございまして、1月26日、これはなぜ1月26日でなくちゃならないかという、2月の河津桜に間に合わせるために必死でやっている。

それがどの程度できているかというのを確認するために行ったところではありますが、非常に順調に進んでいて、素晴らしいものできている。そしてそこに道の駅もできます。これは夏ごろに完成するようではありますが、多くの方たちが伊豆半島に今目を向けていますし、2年後にはオリンピック・パラリンピックもございまして。ジオパークにも認定されました。

わさびも農業遺産に認定されて、多くの世界の人々の観光のメッカにこれからなっていくということで、そのためには道路ということではありますが、一方、河津の七滝というのがありますが、これも1回台風でやられた、この歩道が全部整備されたということで、それも見に行きましたところ、もう整備できているわけですね。

そして『伊豆の踊子』の学生と踊り子の銅像が建っておりましたが、映画に何回なったか御存じですか。吉永小百合さんとか、鰐淵晴子さんとか、山口百恵さんとか、6回やっているんですね。七滝だから7回やった方がいいんじゃないかというわけで、銅像がある。全部そういうことにちなんだ形でやっていますが、映画は今世界中でしていますし、熱海もそういうことに対して関心があるので、『伊豆の踊子』の21世紀版をつくったらどうかと、そういうことを思った次第でございます。

実は、昨日今日とこの賀茂地域、なかんずくこの東伊豆と河津の方を回っているわけで

ございますけれども、今日例えばお昼全員でいただいたのは、稲取高校の被服食物部の学生さんがつくったもので、とてもおいしく、これは防災用にどういうふう健康を維持し、かつおいしくいただけるものにしたらいいかということでつくってくれたものを、今日は学生さんがわざわざ昼食時間、学校からこっちに来てくれて、説明もしてくれていただいたということです。

実は稲取高校、昨日も行きました。そこで新体操の演技を見せていただきました。インターハイに出た演技ですばらしいものですね。それからレスリング部、女の子ですよ。インターハイに出たんです。それから陸上部、これは円盤投げと、それから砲丸投げでトップクラスです。それから卓球部、お坊さんのお坊ちゃんなんですけれども、卓球に目覚めて、ついにインターハイに出た。それからバレー部と、この稲取高校というのは実にユニークな高校だというふうに思った次第で、こういうこれからはユニークな体で覚えていくそういう実学といいますか、算数ができるとか、受験の技術を身につけるとかそういうことよりも、技芸、芸は芸術で、スポーツ的なものも含めて、見てすばらしいなど感動を与えるものですね。技芸を磨く実学を大事にしていきたいと思っていたところ、稲取高等学校というのはそういうことを学校の方針としてなさっているなということを実感し、今日のお昼もそれを実感した次第です。

それから今日はカーネーション畑も見せていただきまして、その「伊豆の花人」という方たちとお目にかかって、若い人がもっと遊休農地を活用して拡大したいと。私は3代目です、私は2代目ですと、それからまた伊豆の下田の分校を出た青年が今度JAに就職できましたと。来年4月からですが、もうどういうわけかJAの服装を着てやっている。張り切っているわけですね。そういうカーネーションで人々の心に、何というんですかね、幸せというか、それを贈るのに従事したいという青年たちと会ってきたわけです。

今日は非常に早く真っ暗な中で起きて、谷津港から定置網を見に行きまして、そして朝採りの採れたばかりのものを河津茶屋というところでいただき、そこを見たりして、ここはこれから大いに発展していくなど。「海と山の風景の画廊」ですね。

そういうところで、この地域、首都圏からも近いということもございまして、ここでそれぞれ東伊豆と、そして河津の代表の方たちのお話を聞きます。そして、これは聞きっぱなしではありません。聞いたことを全部県政に生かすために聞くんです。ただ、ここですぐ答えられることと答えられないことがあります。それも必ずお答えするという形にして、聞きっぱなしの会ではありません。お聞きして、それを実行するために意思決定者として

お聞きする。私が今しゃべるのは、これが一番最初のものですけれども、お聞きすることが目的の広聴会、広報じゃなくて広聴、広くお聴きするという会で、大変楽しみにして参りました。

今日は両町長がいらっしゃいますので、県と町と一緒にやることがあるとすれば、それも一緒にできる、何をするかということについて、この時間を共有できれば、そういうことにも結びつくのではないかと期待しているところであります。2時間、長い時間ではございますけれども、何とぞよろしくお付き合いのほどをお願い申し上げます。

【発言者1】 皆さん、こんにちは。東伊豆町の地域おこし協力隊の発言者1と申します。まずはこのような貴重な席に座らせていただけること、大変光栄に思っている所存でございます。この中では一番若手ということで、手を挙げさせていただいて、まず最初にお話をさせていただきたいと思えます。

私は東伊豆町の地域おこし協力隊員に2016年度に着任をしまして、元々は大学院時代に東伊豆町の空き家を改修するプロジェクトを推進していこうということで、学生団体を立ち上げまして、稲取地区の空き家改修に携わらせていただきました。そのプロジェクトは行政主体で、役場の皆さんの方から事業をいただくという形で、空き家を改修して、何かしら地域の中で活用できるような拠点にしていこうということで活動してまいりました。

改修して実際に竣工した建物を運営していくとなった時に、なかなかやはり地域の中で担ってくれるような方が見つからないよといった時に、私たち学生のメンバーでNPO法人を立ち上げて、実際にその改修した建物を借り受ける形で運営していこうということで、話を役場の皆さんと一緒に進めさせていただきました。

そんな中で私の方が学生時代、毎月1回東伊豆町に通わせていただいていた関係で、この土地のことが大変好きになってしましまして、役場の担当の方に、最初は日雇いのバイトでもしながらいいので、この町に住みたいですという話をさせてもらったところ、地域おこし協力隊の制度を導入するから、その制度を使って引っ越してきたらいいんじゃないかということで、地域おこし協力隊にならせていただきました。

改修プロジェクトのタイミングに改修していたのが、町の稲取地区の消防団の器具置き場で、こちらの席にもいらっしゃる発言者3さんなど、町内の若手の方々と議論を進める中で改修プロジェクトを進めました。

そのタイミングに、消防団の器具置き場にキッチンを入れて、食の拠点をつくったらど

うかという話が決まりまして、第6分団の元器具置き場だったので、そこにキッチンが入ったということで、「ダイロクキッチン」という場所で運営を今させていただいております。

配っていただいている資料の中に「ダイロク通信」という新聞記事のようなものを折り込んでいただいているんですけども、地域おこし協力隊になってから、学生時代から元々発行をさせてもらっていたんですが、毎月1回、この「ダイロクキッチン」の活動を地域の皆さんだったりとか、いろんなメディアで発信していこうということで、こういった記事を町の協力のもと、東伊豆町の全地区に配られる回覧板にこちらを折り込んでいただいて、「ダイロクキッチン」がこういう活動していますよということを発信させていただいております。

これが12月号になっていて、少し宣伝になるんですけども、表面にはカレンダーが出ていて、先ほど知事の方からもお話があったんですが、高校生たちが「あったかふえ」ということで、毎月1回、夕方の4時から7時で、安めの価格で晩ご飯を食べていただけますよという取組をしていただいたり、地元のお母さんに毎週水曜日、今もやっているんですけども、カフェを開いてもらったりだとか、そういうことをやっていただいております。

そんなところで、地域おこし協力隊としての活動のお話をもう少しさせていただこうと思うんですけども、資料の裏面の方にいっていただくと一番上の段、「メインストリートで歩行者天国」ということで、稲取地区のメインストリートを歩行者天国にさせていただきまして、3月2日と3日なんですけれども、「雛フェス」というイベントを実施させていただこうと思っています。

稲取地区が雛のつるし飾りの発祥の地ということで、毎年雛のつるし飾り祭りというものを1月の下旬から3月の終わりまでやっておりまして、ちょうどその3月2日と3日がお雛様のお祭り、桃の節句ということで、そのタイミングに地域を盛り上げるようなイベントができるんじゃないかということで、商工会の青年部の皆さんと私と一緒にイベントを実施させていただいております。

このねらいとしては、ちょっとメインストリートには空いてしまっている商店が多いというところが、学生時代から地元の方が言われているようなところがあったので、何とかしてその空き店舗を1日だけでも開いている状態にすることはできないかということで、商工会の青年部の部長さんに相談をさせてもらった中で、その空き店舗を活用したイ

イベントを機に、地域の空き店舗、空き家の解消に向けた取り組みを進めていけるんじゃないかということで、その第一歩ということで、地域ぐるみでこのイベントを盛り上げていこうということで、歩行者天国を実際に許可もいただきまして、400mほどの区間でやらせてもらいながら、その拠点を中心に空き店舗だったりとか、あとは地域の中のお寺なども活用させていただいて、イベントを盛り上げていこうとしております。

もうちょっとお話をさせてもらいますと、私たちが学生時代関わらせていただいていた学生団体、空き家改修プロジェクトという地域の空き家を改修するプロジェクトがまだ継続していきまして、今年5年目になるんですが、ダイロクキッチンに次いで、今も運営しているんですが、東海汽船の事務所の方で、発着場の近くにある切符売り場になっている場所を、1月から3月しかそこが開いていないということで、学生たちが今改修をしておりまして、来年度から新しい施設としてオープンできないかということで、今動かさせてもらっています。

私の将来的な計画の中では、ここの場所を拠点にさせていただく中で、また新しい地域のプロジェクトを始めさせていただこうかなというふうなことを今考えております。

レーザーカッターを入れて、新しいハイテク機器もこの伊豆半島で学べるよというようなことを地元のお子さんたちに知ってもらったり、あとは都市部の方たちにも、伊豆の環境で働きたいというようなニーズがあるんじゃないかということで、都会にいたら仕事だけの生活を送ってしまうところを、伊豆に来て、半分仕事、半分余暇を過ごすみたいな、そういう新しい働き方、暮らし方があるんじゃないかということで、この場所を活用させていただきながら、伊豆の中でそういうライフスタイルの提案をさせていただこうというふうなことを考えております。

そういう取り組みも、浜松市で2拠点ライフのトークイベントというのを、愛媛県の西条市の方と一緒に、都市部にも拠点をもちながら、伊豆だったりとか、愛媛県だったりとか、そういうローカルなところで暮らすという、2拠点で働いたり暮らしたりするライフスタイルがこれからの時代、とっても豊かな暮らしにつながるんじゃないかということで提案をさせていただいたりしております。

ということで、地域おこし協力隊の任期が残りもう4カ月ぐらいになっておりまして、私の方もすっかり3年間、この土地にお世話になりまして、何とかこの土地にまだ残り続けられるような形で、今いろんな方たちと協力しながら、その任期後の仕事をつくっている状態でございます。

NPO法人ローカルデザインネットワークというNPO法人をやっておりまして、そちらの方で何とかご飯を食べていけるようにということで仕事をしていこうと考えております。以上です。よろしく申し上げます。

【発言者2】 河津町の発言者2でございます。本日はお手元に資料がございます。2枚入っていますので、また見てください。よろしくお願ひいたします。

改めまして、皆様、こんにちは。河津町の発言者2でございます。家族で民宿を営んでおります。商工会女性部として、商工業の発展、地域活性化のために、さまざまな事業を行っていく中で、地域健康づくりの事業をきっかけに取り組んでいる地域振興事業を紹介させていただきます。

河津町の古くから伝わる民謡『河津ばやし』をよさこい調に仕上げ、長きにわたり活動してまいりました。それが平成25年度、町から女性部に新たに曲と踊りをつくって、町おこしをしてほしいとお話がありました。当時は東日本大震災後の津波の影響により、町全体が落ち込んでいる時でした。その上、私たち女性部も高齢化が進み、このまま続けていくことに不安を感じていました。

しかし、このような時だからこそ、前向きに考えようじゃあ、女性部が元気なら町も元気、私たちから元気を発信していこうじゃあ、と、新曲作成に取り組むことを決断しました。さて、どんな踊りにするのか、どんな曲にするのか、何度も話し合った結果、自分たちだけが踊ってみせるのではなく、子どもからお年寄りまで、町民を巻き込んで、町が元気になる曲をつくらうということになったのです。

まず町民に関心を持ってもらうため、歌詞やフレーズ、CDジャケット写真の一般募集をしようと、回覧板を使い、町内2,800世帯へのチラシ配布、幼稚園、小学校、中学校等の教育機関、観光施設へポスター掲示や応募の呼びかけ、さらには青年部には録音協力、町内在住の音楽家の先生の作曲の依頼、歌を歌ってくださる方、振り付けのイラストを描いてくださる方を探し、町内を駆け回り、やっとの思いですべて手づくりのCDができました。

曲名は『花こよみ』です。河津町は花とともに季節がめぐっていることを曆に例えました。歌詞に込められたみんなの思い、踊りに込められた楽しい気持ち、たくさんの方が関わってできた曲です。その思いを忘れず、大切に、子どもたちのふるさとの曲、踊りに

なるよう努めていきたいと思います。今後は、他団体と連携し、コラボレーションなどしながら、活動してまいりたいと思います。

このように、商工会女性部として事業を行っていく中で、一緒に活動してきた先輩たちとの悲しい別れがあり、健康の大切さを強く意識しました。このころ友達に声をかけられて、町の健康づくり食生活推進協議会、略して食推に入りました。食推は1年かけて町の養成講座を修了した人が会員になります。河津町食推は平成9年より活動を始めており、今年度は新たに7名の会員が増え、現在39名で活動しております。行政とも連携し、食育の推進という目的に向かって一緒に活動しています。

また、私たちは家族や仲間、お隣さんからお向かいさんへ、御近所さんに、ちょっとした声かけができることや、地域に根ざした草の根活動ができることの強みを生かして、減塩、野菜摂取の普及・啓発に取り組んでいます。私自身、減塩料理に慣れるのに2、3年かかりました。初めのころはお塩が欲しい、お醤油をかけたいと思っていました。しかし、昆布と鰹節のだしや、素材のうまみを生かした料理のおかげで、薄味でもおいしくいただいています。よい食習慣を身につけることがとても大事であることがわかりました。

昨年度より幼稚園のPTAが行う家庭教育学級の一環として、料理教室を開催し、保護者からは、和食や地のものを使った料理を教えてくださいとの要望があり、サンマの煮物やおから等を一緒に調理し、栄養バランスの取り方についても解説を行いました。

皆さんからは、「今まで味が濃かったです」「塩分の取り過ぎでした」「郷土料理をもっと教えてください」との声があり、次世代に郷土料理を伝えていくとともに、世代を超えた交流の場が大切だと感じています。

これからも行政と連携し、地域活動を通じて、町民主体の社会参加の場を持ち、笑顔の輪、健康の輪を広げていきたいと思います。

御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】 どうも発言者1さん、発言者2さん、ありがとうございました。これから地域おこしは若者と女性が主体だなというのを感じましたね。

発言者1さんは神奈川県横浜市御出身、都会っ子ですよ。この方が大学の時に東伊豆にほれ込んで、それで地域おこし協力隊の第1期生として、そしてこのお雛さまのフェスタ、400mを歩行者天国にしてやりたいと。3年間やってこられた。

これ見たら『ダイロク通信』第29号というわけですから、もう通常、こういうものは3

号出して店を閉じるということが多いんですけれども、29号というのは大したものでありまして、何とかこういう青年が残るようにできないものかと。

河津町でも、東伊豆町でも、ぜひ引き留めるようにお願いをしたいと思うんですけれども、そしてそういう地域おこし協力隊の先輩がこういう形で東伊豆をベースにして、河津町、あるいは伊豆半島全体にいろんな形での発信をしている。浜松だとか、西条市ですか、にも活動の場を広げていらっしゃるということでありますので、こういう人は宝じゃないかというふうに感じましたね。ですから、ここにいらっしゃる方で、こういう仕事があるよとか、一緒にしばらく手伝ってくれないかという人がいれば、まだ3月までありますので、ぜひ御協力の方をお願いしたいと。私の方もちょっと手を回して、いろいろとやってみたいかなと思った次第です。

発言者2さんは力がありますね、さすが河津の商工会。やっぱりこの『花こよみ』というのはすばらしい命名ですね。ぜひCDを流してほしいなと一瞬思ったんですけれども、また踊ってほしいなとも思ったわけでございますけれども、今日はそういう話ではありませんので残念ですが。河津といえばお花、この会場のカーネーションも、それからバガテル公園のバラも、本当にお花と河津のイメージが強いですよ。

ですから花をおつくりになる、その花をどう使うかということで、まずは『花こよみ』としてこういう歌と踊りになさったということで、今、食のことをなさっているんですけども、実は花をつくる名人がたくさんいます。

静岡県には704品目の商品化されたお花があります。1品目につき、今日カーネーションのところに行ったら、130品種ぐらいつくっていると、恐らく200ぐらいあるんじゃないかと思いますね、品種としては。バラなんかは1,000品種ぐらいあるんじゃないでしょうか。だから1品目につき何百品種というもので、毎年毎年新しく品種改良して、今日見たところでは、このカーネーションにブルーがあるでしょう。

このブルーの自生するものではありませんが、これも実はある工夫をしてブルーのカーネーションをつくっているんですよ。だからもうカーネーションづくりでは世界トップクラスです。見えませんか、ブルーのカーネーション、これはやってみてください、絶対できませんから。ある方法があるんですよ、それはちょっと秘密です。

そういう花づくりの名人がいる。あとは花使いの名人をどうつくるかというこういうわけで、実は静岡県庁に来ていただくと、知事室はお花だらけです。誰彼となく飾ってかれているんですよ。焼津の女性が2週間に1回、これの2倍くらいのお花の盛り合わせをば

一んと応接室のセットに置いていかれるんです。買っているんじゃないんですよ、置いていかれる。そうすると例えば河津町長さんとか、東伊豆町長さんが来られると、テレビとか写真でそれが写るでしょう。それが嬉しいんですって。

そうすると、県庁がお花を使う、そういう組織になったんですよ。私は自分から始めることが大事だということで、ぜひ河津町長さん、それから東伊豆町長さんも。つくっている人がいるので、どう使うか。

今度稲取に来年4月から直売所ができますね。これは水産物と農産物、農産物の中にお花も入れて、お花を買うこともできるし、実はここに来ると花のまちに入ったと。熱海からずっと下りてきたら、ここは花のまちだったと。色とりどりの「花こよみ」、曆に応じた花があって、そして季節になるとつるし雛を楽しんだり、そしてまた踊りを楽しんだり、河津桜を楽しんだり、そして食生活を楽しむことができるというふうにして花のまちづくり、伊豆半島は花の半島です。本当にきれいですね。

日本海側だとか北海道は雪に閉ざされますので、花にとっては非常に厳しい。ところが、こちらはこのように美しい燦燦と陽が差しているということで、花にとっては天国なので、それをつくるだけでなく町の中で使う。特に町役場では、常に花が飾られているとなれば、それはそこに勤めている方々の御家庭にもそれが広まるに違いない。特に女性はそういうことに長けています。どのようにしてお花を飾ると全体の雰囲気はよくなるかということで、この河津の町と、それから東伊豆ですね、ここが花のまちになっていけばいいなということ「花こよみ」のお話を聞きながら思ったものです。

ですから、若者と女性、こういう方たちの試みはみんなでいろんな形でできる場所から支えていく必要があるなど、そういうふうに思いまして感じ入った次第です。以上であります。

【発言者3】 皆さん、こんにちは。私は東伊豆町でハウスミカンを中心に青島ミカン、ニューサマーをつくっているミカン農家です。今日はよろしくお願ひします。

この東伊豆町というのは、海から山までの距離が短くて、平地の少ない中山間地域でございます。ただ、東伊豆町は賀茂地域の中でも農業が盛んで、柑橘、イチゴ、カーネーションなど、多くの農産物があります。みんな狭い農地を活用して、ビニールハウスで高品質な農産物を栽培しています。

私がつくっているハウスミカンも、産地としては規模が小さいんですけども、静岡食

セレクションにも認定されています。知事も何年か前に稲取のハウスミカン農家を視察されて、まるで芸術品のような農産物、農芸品とお褒めの言葉をいただきました。生産者も高品質ミカンをつくっているという自信を持って、みんな頑張っているところであります。

そんなハウスミカンの組織なんですけれども、重油の高騰、燃料代が上がってきたのと、生産者の高齢化、後継者不足で農家の軒数は現在減っております。一番多かったピークの時と比べて3分の1に農家軒数は減ってしまっていて、産地の維持が将来的に大きな課題となっております。

そんな中、後継者が頑張っている家も何軒かあります。部会組織の底上げのために、若手の栽培研修会等をここ2、3年ほど前から始めました。自分たちでやりたいことを提案して、農協や農林事務所、伊豆農業研究センターに協力してもらいながら、勉強を進めております。これは私が所属している農協青年部で経験したり、先輩たちの背中を見て学んだことが役に立っております。

農協青年部という組織は、各農協に農家の若手が集まる組織があります。県、全国に熱い思いを持った農家の仲間がおりまして、個人ではできないことも、組織の力を使って、農政活動や地域のリーダーを育てる人づくり塾、マーケティングなどの講師を呼んでのセミナーを開催したり、消費者交流イベントで農産物のPRを行ったりしております。

そんな青年部の地域での活動を少し紹介させていただきます。1つ目は「食農教育」です。よく「食育」という言葉を聞くと思うんですけれども、青年部では食べるものを育てるところから始めますので、「食農教育」と呼んでおります。

稲取小学校では5年生を対象にサツマイモの栽培を行っています。苗を植えてから収穫まで、草取りなどの管理をやってもらい、農作物を育てる大変さと育つ過程を学んでもらいます。収穫では楽しみながら達成感を味わってもらい、食べることで、さらに感動をしてもらえらると思います。

そして最後に、サツマイモをスーパーの駐車場をお借りして、販売も小学生が行っているんですけれども、産業としての農業をそれで知ってもらえらると思ってやっております。その中で子どもたちが農業に少しでも興味を持ってもらって、将来農業をやりたいよという子が出てきてくれれば最高なんですけれども、農業や食に関わる仕事に興味を持ってもらえたららると思って活動を行っています。

2つ目は、農協青年部と東伊豆町とで結んでいる防災協定についてお話しします。東日本の震災後、青年部の仲間の中でも、災害とか防災について話をよくするようになりまし

た。もし伊豆半島で災害があった場合、多分道路が寸断されて、伊豆は陸の孤島になってしまうんじゃないかな。その時農作物があっても、出荷はできません。腐って廃棄することになってしまいます。

だったら、避難所や地域住民に提供できないだろうかというところから、この防災協定の話が始まり、農家には農機具だとか、機械、あと資材などありますので、そちらを提供して、復興や避難所生活を快適にするのに使えないかと、仲間の中でいろんな意見が出てきまして、オープン町長室で町長に提案させていただいたところ、ぜひやろうと言っていただき、防災協定を結ぶことができました。

実際に農家の持っているもので何かできないだろうか、やってみようということで、ビニールハウスで使っているビニールと鉄パイプを使って、簡易給湯器とお風呂をつくって入れたこともございます。それは結構好評でしたので、町長から町の防災訓練でもぜひやってほしいとお声がかかりまして、9月1日防災訓練で給湯器を披露したこともございました。現状、完全にまだ農家の道具のリストアップが終わっていない状態ですので、今後いつ来るかわからない災害にしっかり備えていきたいと思っております。

このように農協青年部の活動をしてきて感じたのは、農業の産地を守っていくのは、自分が農業を頑張るのはもちろんなんですけれども、地域と人が元気でなければいけないと思いました。今後は後継者を育てること、地域を守ること、そして青年部で経験したことを若い農家に伝えていって、将来自分の子どもが農業をやりたいと言ってくれるような元気な産地にしていきたいと思えます。

御清聴ありがとうございました。

【発言者4】 皆さん、こんにちは。私は河津でわさび栽培をしている者です。今日はよろしくお願ひします。

私の所属している東わさび共販委員会は、生産者数は37名、総栽培面積8ヘクタール、年間出荷量が1万7千ケース、わさびの部分で34トン在京浜市場10社、豊洲、太田、横浜等に出荷しています。その他として、わさびの花や新芽も出荷しています。共販体制によりまして、出荷量の情報を事前に市場に提供することで、有利な販売につなげています。

そんな中、私たちは5年ほど前に委員会の中で青年部を立ち上げました。市場巡回やスーパーなどでの消費宣伝を行ったり、部員の園地巡回、わさびの生育状態を確認しながら、意見交換をしています。また、先進地周り、自分たちも誇りを持って先進地だと思ってい

ますが、湯ヶ島、中伊豆の方へ視察に行き、育成知識を学び、個々の生産能力を高めています。

私は就農して21年、4代目のわさび農家です。面積が40アール、わさび田は春と夏収穫できる場所と、秋冬収穫できる場所、2カ所で栽培しています。家族4人経営です。マニアックかもしれませんが、実生苗といいまして、それを80%、メリクロン苗を20%定植し、年間を通じて出荷しています。実生苗は10万本を委託し、1万本は自分で生産しています。

この実生苗というのは、株ごとのばらつきが出やすいので、メリクロン苗を活用し、栽培場所を減らし、単位面積当たりの収穫量を高める努力をしています。その際に、その沢にあった優良系統の苗を探し出すというのが一番難しいので、それも同時に行っています。

ここ河津町というのは、他産地に比べて温暖なため、1年ほどでわさびが収穫できます。でも、ここ数年、猛暑によってわさびが栽培しにくくなっています。今年は自分のわさび田というのは一番里沢にありまして、上から葉っぱが枯れるほど暑さをくらしまして、そういう問題点といたしますか、そういうのを今後、伊豆農業研究センターわさび生産技術科さんとともに、暑さに強い系統の苗を育成するなどの支援を期待しています。

また、今年世界農業遺産に認定されました畳石式という栽培方法なんですけど、これは通常、昔のわさび田、ただ水が流れるような沢ではなく、有酸素量を増やす栽培方法なんですけれども、それは普通のわさび田と使って、2倍3倍の水量が必要です。ここ数年、異常気象によって安定した水量が保てなくなっています。

ああいう大雨だったりとかは、以前から心配されているんですが、逆に渇水などといったことにも悩まされています。そんな中、自分としては近隣のわさび生産者のしまい水を電気でポンプアップして、それを定期的に流すような形をとり、確保しています。こういった自然災害に対する対処法をもっと学んで、少しでも被害を減らせたらと考えています。

また、近年の和食ブームと世界農業遺産になったためか、わさびが注目されているような感じがします。その1つに、私テレビを見ていたんですけども、全国放送の番組で20代のモデルさんが洋服を選ぶ際に、ちょうどこういう色というか、薄緑の色を「わさび色」って表現したんですね。これは結構、40年生きてきた中で、自分が20代だったら、そんなことは言わないかなというぐらい、若者も注目しているんだなって思いました。

なので、僕はこれをチャンスと思い、本物の味をより多くの人に知ってもらえるよう、

今まで以上にいいわさびを栽培して、息子が2人います、その2人が継いでいってくれた
なと思って頑張っています。以上です。

【川勝知事】 お2人、資料見ると同い年で、それぞれ東伊豆と河津で、こちらは柑橘、
こちらはわさびを生産されていて、そして発言者4さんは4代目だと。発言者3さんとこ
ろも代々柑橘類の名人ですね。農業芸術品、農芸品というのにふさわしいニューサマーオ
レンジほかについての最高の匠といいますか、先生ですね。そういう技をずっと継承され
てきておられると。その意味ではこの発言者4さんと同じで、発言者4さんは4代目で、
さらにお子様に継がせて、しっかりとした技術をまた代々の伝統を継承させたいと思っ
ていらっしゃるのが、非常に頼もしく思った次第です。

それと同時に、発言者3さんの場合は、子どもたちに食育というけれども、そうではな
いと。食に関わる教育と、食の材料になる農作物をつくる農作業、農業の教育、この食と
農の教育をします。しかも希望も言われました。これを通じて将来、農業をすることを望
むそういう子どもたちをつくりたいと。これはもう本当にすばらしい先生だというふう
に思います。

実は全く同じ気持ちを持っておりまして、今までいわゆる進学校に行くことが、何と
なく中学校にいる子どもたちにとっての目標であり、そこからまたいい有名大学に行って、
大きな会社に入ると。

こういうコースはもう終えていいんじゃないかと思っております、それで私はむしろ
こういう地域は、それとともに同じく身につく、例えば保健とか体育とか、あるいは家庭
科とか技術とか、音楽とか美術とか、そういう科目があります。そこにヒントがあると。

私はそこに特化しているような高校に知事として応援したいと、これは私の個人的な思
いで、田方農高とか、あるいは下田の南の農業の分校であるとか、あるいは工業高校とか
商業高校とか水産高校とかに知事賞を出しています。

ついにそういうことが1つになりまして、磐田の農業の学校が今度1年半後には正式な
大学になります。農業のプロを育てていくと。そこに行けますよと。そしてすぐに実践に
入れますよ。そしてこっちに青年農業士だとか、農業経営士とか、いわば大学で言えば教
授ですね、若手の教授、あるいはシニアの教授がいる、そういう人たちを巻き込みたいと
常々思っていたところ、それを発言者3さんが実践されているということですね。

ですから、こういう裾野が広がって農業や水産や林業や、あるいは藤井聡太君のような

将棋ですね、もう14歳で50勝して、一気に将棋の道で生きていくということが、彼の場合はっきりしていますね。そういうのでいえば、スポーツだと沼津の平野美宇ちゃん、あるいは伊藤美誠さん、あるいは水谷隼さん、みんな中学の時から、それをやると決めているわけじゃないですか。

同じように自分は農業をやりたいとか、あるいは漁業をやりたいとか言う子はいるんですよ。そういう子どもたちがプロとして育っていけるように、産業としてちゃんと成り立つような仕組みを静岡県全体でつくりたいと、こう思っていたところ、そういうことを発言者3さんは仲間と一緒に青年部でやっていらっしゃるということで、心から敬意を表すると同時に、応援したいというふうに思う次第です。こういう運動がほかの青年部にも広まっていけばいいなと思いました。

それから町と防災協定を結ばれたというのも、これも大したものですね。農業機具が防災に役立つ、それからまた農産物も防災品として活用するにはどうしたらいいか。実によく考えて仕事をされているということで、実はもう何事も勉強で、その道を究めていくと、それに付随した形でこれがどういう形で使えるか、社会のため、人のためになるかと、恐らくお父上もおじい様も立派な方というふうに、発言者3さんの話を聞いていただけだと思いますけれども、またお仲間もそういう優れた人がいるんでしょうね。ですから全然浮いてないですよ。そういうことで、心から感心した次第であります。

それから発言者4さんは、もうわさびということで、このわさびがついに世界農業遺産になって、要するに人類の宝物になったわけです。だからといって、どこでもつくれるわけじゃない。いや、むしろ日本でしかつくってないわけですから、陸わさびがありますけれども、水わさびに関しては静岡県が世界で1位なわけですね。

それで、わさび色というのはなるほど、茶の色というと、日本ではいわゆる萌葱色ということで、黄緑色のイメージがあるんですが、これ茶色ではないじゃないですか。茶色でしょう、お茶の色なんです。元々こういう色だったわけですね。それを日本人は栽培しながら、若芽が出ると、それをすぐに茶摘みをする、そういうふうにしてしまったのは江戸時代ですから、それ以前はお茶は茶色ですよ。

また、お茶を昔は食べておったわけですね、中国あたりでは。それが煎茶になって、こういう黄緑色みたいな色が茶のイメージですけれども、茶色が黄緑色とはおかしいですよ。だからわさび色の方がぴったりで、ファッションの世界で生きている青年が、「わさび色」と言ったのが嬉しいというのは、やっぱりこのわさびについての思いがあるからですね。

我々は聞き逃す場合があるかもしれませんが、発言者4さんはそれをちゃんとお聞きになっている。

そして、河津が実はわさび井の発祥ですよ。ただわさびそれ自体の発祥の地は、静岡市の奥の方に有東木というところがあります。有る無しの有という字に、東という字を書き、それからツリー、木を書いて「有東木」、その奥のところでもたまたま発見されたものを家康公に献上したところ、それが珍味だということで、それが栽培されて、水のきれいなところで栽培されて今のような形になったということでございまして、まずはこのわさび生産者のネットワークをつくってほしいですよ。

お茶だって、煎茶煎茶と言っていたのが、今は抹茶になって、静岡県のいわゆる抹茶ですよ、この90%はいわゆる茶の湯で使うものではなくて、アイスクリームだとかケーキだとか、いろんなものに使われる、その材料になっているんです、静岡県の抹茶は。それはどんどん伸びています。いろいろな活用方法がある。

わさびはこれからですよ。しかもわさびの生産はここですから、これから伸びる。ただし、今、発言者4さんがおっしゃったような自然現象で、温度が保てない。どうしたらいいかというのは、これは自然相手ですから、なかなか難しいと思いますけれども、挑戦するに値するということですね。

ですから、この地のわさびの優位はあるし、世界から大事にしろと言われているところでありますから、まずはわさびの生産地自体が、そのノウハウを共有する。競争するというよりも、共有しながら個性を出していったらいいと思います。

足した方がいいと思うんですよ。力を合わせた方がいい。力を合わせながら、対立しないで個性を出していけばいい。こういうやり方で静岡県全体のわさび情報をほかの人も知って、こういうわさびの食べ方をした時には河津に、あるいは中伊豆に、あるいは湯ヶ島に、あるいは有東木に行くというふうにして、まずはわさび農家自体のネットワークづくりを県もお手伝いをしたい。

そうした中で今、各地でいろいろと同じような問題を抱えておられます。これを共有することを通して、自分のところで使える技術を活用していくというふうにしていきたい。いろんなものを足すんですよ。あれかこれかじゃなくて、あれもこれもなんです。1と2の和は3と言うじゃないですか、3と4の和は7と言うでしょう。和というのは足すことで、大いなる和、「大和」と書いて、それを訓読みするとどうなるのでしょうか。ヤマトで

しょう、「大和」と書けば。それは日本なんです。いろんなものを足して、かつ調和させる。相手を蹴落とすんじゃないですね。

皆一緒にやるということで、そういう意味で今わさびは世界の宝物になったので、発言者4さんのような、優れた伝統を持った4代目が、いわば将軍家と言えば家綱ですよ。次は綱吉、こういうふうになっていって、3代で終わっていないところが嬉しいじゃないですか。

しかも若いということが、また我々にとっても頼もしく思うところがあって、今発言者3さんと発言者4さんの話、さすが河津、それから東伊豆だなというふうに思った次第ですね。ここはそういう青年を育てる場所なんですね。

【発言者5】 皆さん、こんにちは。NPO法人Mingle Izu 代表理事を務めさせていただいております発言者5と申します。本日は本当にお忙しい中、こんな貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。よろしく願いいたします。

私たちMingle Izuの主な活動内容は、来年第4回目となる伊豆稲取キンメマラソンを主催し、今年は新たに稲取に13年ぶりに盆踊りを復活させ、いなぼんとして今後もエンターテインメントで引きつけるまちづくりを追求していきたいと考えております。

キンメマラソンは、本当ですと高低差というのはマラソン大会としては嫌われる方なんですけれども、この高低差を売りとし、去年は「最高に楽しい地獄へようこそ」というコンセプトで、今年は「せえせえ地獄を跳んでこらっしえ」というコンセプトでポスターが貼られております。県庁の方にも走るのが好きな方がいらっしゃるということでしたので、ぜひお待ちしておりますのでお願いいたします。

キンメマラソンは昨年、北は北海道、南は熊本から約2,500名のランナー、そしてそれに伴う御家族にお越しいただきました。リピート率も4割と、大変高評価をいただいております。伊豆全域には1,280名の方に宿泊していただいております。電車の利用も含め、非常に経済効果の高いイベントに成長していると考えております。

キンメマラソンの高評価のポイントは幾つかありますけれども、やはり町民性が活かしたイベントであったことが一番であったと考えております。この町では、運動会や町民大会の時に、自分の子ども以外でも一生懸命応援する町の皆さんの姿が見受けられます。

ランナーに町の中を走っていただくことで、本当にキンメマラソンはすごい狭い路地りとも走るんですけれども、そういった生活する町の中を走っていただくことで、たくさん

の方が応援しやすい環境をつくることができ、その結果、ランナーを一生懸命応援してくれる町民の皆さんの姿があります。そこで辛くても「頑張れ」と声をかけてくれることが、ランナーにとって一番忘れられない大切な思い出になるからです。

そして、励まされるのはランナーだけでなく、町民の高齢化もあり、イベント会場に行くことが困難な方も、家の前で応援していると、ランナーが車椅子に手を添えて、「ありがとう」と伝えてくれるのです。この光景に、たくさんの方が「やってよかった」とおっしゃってくださいました。

私たちNPOは女性10人で構成されております。地元のメンバーだけではなく、この地に嫁いできた方もいます。いろんな視点で考えながら、女性がつくるまちおこしとして、まずこのマラソン大会を立ち上げました。

マラソン大会にはエントリー費というものがあるんですが、予算をエントリー費で賄うのは不可能だと言われながらも、手作りや町の皆さんに作業を手伝ってもらい、何とか3回を終えることができ、それでも最初は課題が多く、怒られるばかりで、何のためにやったのか、やらない方がよかったのか、みんなのモチベーションを保てるのか、いろいろ考える日々がありました。イベントを立ち上げて、苦労しなかった私たちに、また踏ん張ろう、もう1回頑張ろうという活力を与えてくれたのは、ランナーと応援して下さった町の皆様でした。

そして、最初こそ、たくさん言い合いもしましたが、いつでも「頑張れ」と励まし続けてくれた町長はじめ、町の役場の皆様、ボランティアスタッフとして参加してくれる皆様といい関係をつくることができるようになっていったことが、一番の強みではないかなと考えております。

人口減少はどこも同じで、止めることはできません。小さな町だからこそ、官民一体となり、進めていくながら、問題ができたなら、みんなで知恵を絞り、いい策を練っていければいいと考えております。

特にランナーからの評価点には、直してほしいことも明確に記載されており、そこを解決していけばいいのなら、教えてくださることは宝だと考えるようになりました。

盆踊りに関しても、たくさん課題も見えました。その倍、やってみたいことも増えました。大事ななのは、まず踏み出すことで、もっと大事なのは続けていくことです。そこで、どう続けていくためのお金を生み出す仕組みをつくり、充実したイベントを成り立たせて

いくのか、まちおこしをすることで毎年多くの成長をさせていただいていると感じております。

とても基本的なことですけれども、小さな町にはいざこざもよく見受けられます。そんな時、私は本で読んだ隠岐の海士町の町長の言葉を思い出します。小さな町ではありがたい足を引っ張り合うことについて、海士町の町長は、「足を引っ張らないで手を引っ張り合え」とおっしゃったことがありました。

既に私たちも中年層です。ここにいる発言者1君たちもそうですけれども、若者が何とかしようと奮闘し、夢ややりたいことを具現化していく姿を見て、とてもうれしく思います。私たちは今までの経験を生かし、次の世代へ手を引っ張ってあげられる大人でありたいと思います。

まちおこしはやった人にしかわからないことも多々あります。それぞれに本職があり、別にやらなくてもいいことなのです。それでも多くの時間を割き、ボランティアをしていることをたたかれ、次から次にありもしない噂が流れる。でもある時気づくのです。何かを成し遂げる時、一番必要なのは精神力と体力です。結構自信がある方なんですけれども、そのパワーがなくては、すべてを成し遂げることはできません。そのパワーはランナーと同じく、「頑張れ」と「ありがとう」から私たちはもらっております。そう言うてくださる方たちのためにやっといこうと決めました。

町の中で作業していると、御高齢の方が「がんばらっしえいよ」と、最近では「キンメの親方」と声をかけていただいて、私はいつから「キンメの親方」になったのかなと自分でも笑ってしまいそうになりますけれども、皆さんがつくってきてくれたこの町で、私たちは育ててもらい、今この町を愛し、何か恩返しできることがあったらと考えております。

それと同じく、若者や子どもたちにそういうものを感じてもらえるようにできることといえ、自分たちの手で町をつくるということの楽しさを見せていくということ、これに尽きるのかなと感じております。

私の好きな孔子の言葉で、「天才は努力するものには勝てず、努力するものは楽しむものには勝てず」と、何かに興味があって頑張りたいと思っている、つまり努力を努力と認識してしまっただめで、努力は努力と思わず、気づいたら楽しいから頑張ってしまう、これが理想です。

若者に私たちをどんどん利用して踏み台にしてもらい、楽しむ気持ちを忘れずにやれる

環境を与えてあげられるように、未熟な私たちもまだまだ頑張らなければと考えております。

キンメマラソンには500人を超えるボランティアスタッフが、南伊豆、伊東、また遠方からも来てくださっております。ありがたいことに、何か手伝えることがあればと、年々声をかけてくださる方も増えております。そんな中、毎年新たな試みも実践するようしております。

キンメマラソンは補助金や助成金に頼らないイベント、というコンセプトでスタートしました。お金のやりくりは大変ですけれども、責任も自分たちにあるので、チャレンジするところはしていきたいとも考えております。

クラウドファンディングなど、たくさんのファンを集めればお金が集まる時代になりました。自分たちでブランディングしていく楽しさ、その結果のスピード感も楽しむことができる時代になったんだなと思っております。時代の流れのスピードはめまぐるしく、速く、たくさんの情報が飛び交う中で、フットワークは軽く、いろんなことにチャレンジできるのは、まともやすい小さな町の特典だと考えております。

10年後、20年後の未来の自分たちが住みやすいまちづくりのために積極的にアイデアを出し、どこかの町がやったことではなく、唯一無二のまちづくりこそが、今一番必要な準備だと思っております。一NPOとして、この町でできる可能性を存分に楽しみ、発信していきたいです。ぜひ一度、川勝知事、県庁の方にもキンメマラソンにお越しいただいて、楽しんでいただけたらと思っております。

ゴールエリアには、来年漁協の直売所もオープンしており、ランナーも大変楽しみにしております。全国から来るランナーに利用し、発信してもらえるよう、今漁協さんと楽しく取り組んで、いろいろ計画しているところであります。直売所に関して賛否両論あったかと思いますが、やり方のアイデアは山ほどあるはずです。それを見出せる想像力があるのかどうかだと思っております。

まずは自分たちが楽しむこと、そしてお客様の目線にどこまでなれるかという基本的なことを忘れずに、これからも精力的に活動に取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

【発言者6】 こんにちは。河津町で子育て支援読書アドバイザーとして活躍させていただいております発言者6といたします。よろしくお願いいたします。

私は河津町で18歳まで育ち、幼稚園の先生になるため、大学進学で横浜の方に出ましたが、3年ほど働いた後、河津へ帰ってくることに決めました。24歳の時に思ったことは、河津がやっぱり好き、住むなら河津がいい。結婚して、もし子どもに恵まれたら、私たちと同じように河津で育ててほしい。

横浜の子どもたちもちろんかわいかったですけれども、自分が持っている力を存分に発揮し、役に立つ仕事をするなら、ふるさとである河津で、河津の子どもたちの先生になりたい、そう思って、現在は幼稚園教諭を経て、家庭的保育者として、自分の自宅で、家庭で子育てをするような雰囲気の中で、ゆったりと保育を行う仕事をしています。

そして、今もなお思うことは、20年前と変わらず、河津を愛し、自分のふるさと、ここで育ったことを誇りに思える子どもを育てるために活動していきたい、そんなふうに思っています。

そして、その1つとして「かわづっこ子育てねっと」という育児サークルや託児、そして小学校での読み聞かせ等の子育て支援グループの集まりでできた団体の活動を行っています。年に3回の読み聞かせを中心としたお楽しみ会や、各グループの活動など、皆さん子育てのために一生懸命頑張っています。私は図書館に数年勤めていたこともあり、幼稚園教諭をしていたころから、とても大好きだった本を通して子育てを支援できたらと考え、絵本の読み聞かせ、お話し会を中心とした活動をしています。

その後、静岡県の子ども読書アドバイザーの講習会を経て、現在パパママ学級での講師、これはおなかにいる赤ちゃんへの読み聞かせも含まれています。ゼロ歳児から3歳児までの親子を中心にお話し会を週に1回、そのほか幼児、小学生を対象としたお話し会、小中学校の朝の時間を利用しての読み聞かせ、ブックトーク、本の紹介等、また家庭教育学級では、子育てをするお母さん方に本のことについての紹介を行っています。

10年ぐらいかけて、胎児から中学生までの子どもたちと関わるチャンスを得ることができました。本を通して物語のおもしろさや、知らなかったことへの新たな情報、興味や関心を広げるための本を紹介していくことももちろんですが、私は河津のすべての子どもたちとつながることができたことをとてもうれしく思っています。

まちで会った時に挨拶をすることができます。各学校行事等で頑張っている姿を応援することができます。よかった事柄や頑張ったことなどを褒め、認めることができます。幼少期、学生時代をここ河津で過ごした子どもたちの未来に向かって夢を追い続ける姿を、ずっとここで応援し続けることができます。子ども読書アドバイザーとして、子育て支援

に携わる者として、自分にとって大好きな本を通して、大好きな子どもとつながることができるのが、とても幸せだと思っています。

河津に育ってよかった、ふるさとが河津でよかった、そう思ってもらえるような素敵な思い出や子ども時代、大事にされていると感じる、そのような思いを胸に、将来の糧として生きていけるような子どもたちを育てたい。そのために今、私たちにできることは何だろうと考えた時、今していることを長く続けていくこと、この活動を受け入れてもらえるように、新たに自分磨きをすることだと考えています。

子どもたちが大人になり、1冊の絵本を手にした時、河津で育った幸せな時間を思い出してくれたらいいな、この本知っている、内容は覚えてないけど、不思議と温かい懐かしき気持ちになるな、そんな本との出会いが1冊でも子どもたちの中に残っていて、思い出してもらえたなら、そんな期待もしています。

最後に、『はらぺこあおむし』のお便りを配付させていただきました。このお便りは12年前、お話し会が発足した当初から月に1回配付しているものです。気づいたら現在147号となりました。147号の中には、私の3人の子どもたちの子育てについて、子育ての楽しみ方、絵本との関わり方、季節の楽しみ方、河津町のよいところの紹介など、子育てエッセイとして月の行事と一緒に書いています。10年経って社会は変化しても、子どもは変わりません。みんなママが大好きです。そんな子どもたちの思いを伝えていくのも私の役割だと思っています。

親子で楽しむ時間を大切に、あっという間に過ぎていく、かわいい、愛おしい時間を大事に過ごしてもらうために、ほんの少しのお手伝いをこれからも続けていきたいと思っています。今回は自分の子育てについて載せてあります。よろしかったら御覧ください。

河津町は子育てのしやすい町です。子育てサークルやボランティアさんたちもたくさんいます。皆さんとっても子どもが大好きで、子ども一人一人をよく見て、声をかけ、大事に思っています。東伊豆の親子の方も、実は河津の子育て支援サークルに参加したりしています。

今後は河津町だけでなく、東伊豆町、下田、西伊豆と、この地域全体で子育てをしていき、にぎわいを育む子どもたちを大切に大切に育てていけたらいいなというふうに考えています。どうもありがとうございました。

【川勝知事】 さっき 41 歳の男性 2 人のお話を聞いて、逞しいなと思ったんですが、今、発言者 5 さんと発言者 6 さんのお話も、まことに河津、それから東伊豆、幸運ですね、こういう人がいるというのは、すごいことで、とにかく伊豆稲取キンメマラソンですね。2,500 名の参加者が来た。御家族もいらっしゃると。多くの方がここに泊まっていけると。これを彼女がやっているんですから、大変なことです。

地獄だというわけですね、アップダウンがあるので。そうすると、これに挑戦したい人というのは必ずいる。実は静岡県庁にもマラソン大好き人間がいて、このキンメマラソンですね、普通のフルマラソンとは違って、すごいこと書いてありましたね、ここに。げんなり坂とか、そういうコースを、この東伊豆でしかとれないコースを使って走る。フルマラソンよりも大変だという噂もあるそうで、それが恐らく今回の 3 回目の継続になったのではないかと考えておいて、うちの県庁にも声をかけまして、ぜひ 1 人でも多くの猛者をこちらに送り込みたいと思った次第であります。

とにかく努力することも大変だけれども、それ以上に楽しむということが大切だということに発言者 5 さんおっしゃいましたけれども、まことに言われるとおりでな。哲学を持ちながら、ただ「キンメの親方」というより「キンメレディ」ですね。そんな感じであります。これからも体を大事にして、4 回目も成功されるように心から期待したい。我々の方もこのパンフを配りまして、申し込めるように、申し込み期限は来年の 2 月 28 日ということですから、まだ間に合いますので、ちゃんとやります。

それから発言者 6 さんは、こういうような読み聞かせの上手な方というのは、今お話聞いていてわかりますね。プロとして横浜で仕事をされ、こっちに帰ってこられて子どもたちを教える能力と技術を持って、今度大好きな本を河津から東伊豆、さらにほかのところにも広げたいとおっしゃっておられるので、子どもは字はなかなか読めませんが、音として聞いていく。体で、五感で学んでいきますので、いいお話をそのリズムとともに聞いていく。

私は日本という国は、1 万数千年あるわけですね、縄文時代から。縄文時代というのは 1 万年間、そして文字がないでしょう。じゃどういうふうにして人々はあの平和な縄文時代を過ごしたかということ、これは語りだったと思います。語り、文字じゃないんですね。

それから弥生時代が 3,000 年間あります。この時代にもお隣の中国、韓国では文字使いますけれども、そこの人たちが来ていますけれども、この国は文字使わないですよ。そし

て文字を使うようになったのは、そうですね、今から1,500年ぐらい前から突然使うようになった。

これは理由があって、一番大きな理由は、静岡県が、韓国に百済という国がありまして、そこが滅びそうになって、実際滅びるんですけども、それを助けに行って、結局負けて、向こうの百済のいわば貴族、王様一族も含めて全部日本に流れてきます。その人たちが奈良という都をつくる原動力になるわけですが、彼らは漢字も自由に駆使することができる。そのあたりから漢字を本格的に使うようになった。

その当時の文字というのは漢字しかありませんから、それ以前は全部語りだったと思います。『古事記』というのも、稗田阿礼という人が記憶していたのを太安麻呂が記録するというもの。だからずっと語ってきた。そういうふうにしてこの国の一番の文化の基礎には、音を通して聞くというのがあったと思います。

その音を通して聞く時に、やっぱりいい調子で聞くという、その調子は何かという、七五七五七七とか、七と五の組み合わせじゃないかと。そういう形でこの国はいろんな文句を覚えやすくしてきたんじゃないかと。ですから「敷島の道」というふうに言います。敷島というのは日本のことです。それは和歌のことでしょう。大和歌、つまり五七五七七で、これは天皇陛下が皇室に入ると、必ず和歌を詠まないといけないですよ。1月の初めに歌会始というのがありますけれども、あれは題があって、その題を詠み込んだ和歌をつくらないといけない、これが仕事になっているわけですね。だからこれはここに五七五七七のそういう調子を通して、人々は語り継いできたんだらうというふうに思うんですよ。

ちなみに洋楽というのが来た、いわゆる西洋の音楽ですね。そういう音楽の中で、滝廉太郎という人が洋楽の日本におけるシューベルトに当たる人だといいますけれども、あの人の例えば『春』という歌、「春のうらの隅田川、上り下りの船人が」、こういうふうに七五七五でつくっていくですよ。あるいは『富士山』の歌、「頭を雲の上に出し、四方の山を見下ろして」と、七五七五でつくっていくですね。演歌も全部そうです。「髪が乱れに手をやれば」、そういう七五七五でつくっていくと、ずっと入るんですね。

その語りの文化というがあるので、これを子どもたちにいい中身のをいい調子で聞かせていくというのは、忘れないという方法で、我々は文字に書けば忘れないと思えますけれども、それは近々1,500年の歴史でしかないというふうに思います。

そういう意味で、いい書物をまずは語り聞かせて、そして知らぬうちにそのうちの1節などを覚えてしまうということになりますと、その子どもの感性の核にそれがなると思い

まして、これを横浜から帰ってこられて、読み聞かせの先生としてその輪を広げていらっしゃるということで、ぜひこういう運動はこれからも協力する人が増えればいいなど。

そして、しかも先ほど発言者5さんが最後に言われた楽しむことが大事だと、楽しんでやっているとおっしゃっていますから、この女性2人はそういう何かやる時の心構えみたいなものを既に努力を通して自分のものにされている方だなどと思った次第であります。ありがとうございました。

【傍聴者1】 こんにちは。東伊豆町に住んでいます傍聴者1と申します。

駿河湾フェリーのことについて聞きたいんですけども、このフェリーと空港とのアクセスの可能性というのはないのでしょうか、静岡空港との。まだいろんなものはないかと思えますけれども。

【川勝知事】 御質問ありがとうございました。どうぞおかけくださいませ。

フェリーというのは今のところは清水港、静岡市の清水港ですね、そこから土肥に来ております。土肥から清水、これは海の航路で、土肥からは空港は遠いですよね。清水からは近いんですが、そうはいつでも、清水から空港にどういうふうに行ったらいいかというところ、そこからJRに乗って静岡駅まで行って、そこからバスに乗る、あるいは島田というところまで行って、空港バスがありますので、バスに乗るという形でしかつながってないです。

だから空の港は富士山静岡空港、これは島田にあるんですよ、牧之原に。ですから大井川より向こうなんです。こちらから行くと富士川があって、安倍川があって、大井川がありますが、その大井川の向こうの牧之原の台地に空港がありますので、ちょっと空港とフェリーとの連絡はすぐにできない。

ただ、フェリーの今船着き場が、すぐにそこに公共交通機関が来ていません。今、検討されているのは、フェリーの船着き場をJRの清水駅のすぐそば、今タンクがあるところ、タンクはもう使わないで、そこに火力発電所をつくるという計画があったんですが、それもなくなりまして、そののところに持ってこようという検討がなされています。そうすると、フェリーを下りればすぐにJRに乗って、静岡、もしくは島田に行って、そこからバスなんです。

しかし、新幹線が空港の真下を通っているんですよ。その空港の真下に新幹線の駅がで

きたら、そうすると熱海に行くでしょう、あるいは三島に行くでしょう、そこから30分で空港です。ですからフェリーに乗るよりも、新幹線に乗って、空港新駅で降りたら、真上が富士山静岡空港。

富士山静岡空港というのは標高130mのところにあります。ですからちょっと小高いところで、そこからは伊豆半島が見えますよ。富士山も見えます。南アルプスも見えます。お茶畑も見えます。そういうすばらしいところでございますが、質問は交通のアクセス、空港と海の港と一体的にやれということだと思いますけれども、ぜひそれは1つずつ具体的にしていきたいと思います。

【傍聴者1】 フェリーが実際に下田あたりまで来てくれたらいいなと思ったんです。単なる交通だけじゃなくて、富士山を見ながら観光のために、そのフェリーが活きたらいいんじゃないかと。

【川勝知事】 賛成です。ところが、下田に行くにはフェリーは外洋に出ないと。石廊崎のところを回らないといかんでしょう。これが法律上できないんですよ、今。そういうことですよ。だから私はフェリーが下田まで来れば、これは伊豆半島を周遊できる形になりますよね。それが一番いいと思って検討したことがあるんですが、今のところ、フェリーは内海を、駿河湾の中を動く以外にないと。

しかしお考えはもっともだと思いますよ。これ、また、国交省相手に談判に及ばないと、それがなかなかできないということがございます。

【傍聴者2】 東伊豆町の傍聴者2と申します。町内で飲食業を営んでおります。

飲食業とは全く関係ない質問なんですけれども、資料の静岡県総合計画に、「東京一極集中のために地方の疲弊が目立ちます」という文言があるんですけれども、これを自分もものすごく感じているところでありまして、要するに東伊豆というのは過疎地域に当たるわけなんですけれども、本当にゆっくりとした進行ではあるんですけれども、今サテライトオフィスという、いわゆる東京の大きな企業などを地方の空き家ですとか、そういったところに誘致するという話が出ているんですけれども、今情報の時代になりまして、物流とか関係なく、ネットワーク回線さえ通じれば仕事ができるという業種が増えております。

こちらで企業を誘致するに当たって、税制の優遇とか、そういったことは県として難しいのでしょうかということをお伺いしたいんですけれども、いかがでしょうか。

【川勝知事】 問題意識は傍聴者2さんと私も同じですね。日本全体、東京に若者をとられて、若者はそこに一旦入り込んで、そこで結婚して、結婚するということは1つ屋根に住むことですから、そうするとマンションというか、マンションを買うだけのお金を30歳前後の青年は持ってないですね。

そうすると数千万円のマンションを購入したと。そうすると、それを20年とか25年とか、ローンで返していかないといけない。2人の収入を合わせて返していかなくちゃいけないから、子どもは保育園に預けざるを得ないと。そして結局出られないわけですよ。

ですから、そこに行って結婚してしまうと、あそのコンクリートの中で住まい続けなくちゃいけない。それが終わるのが定年になったところで、その時までは出られないので、私はそれは蟻地獄だと。

だから東京は1回行ってみるのはいいと。しかしながら、本当に終の棲家かどうかを、結婚する前後ですね。30歳前後、パートナーもいらっしゃると。20代の後半から30代の前半ぐらいに、やっぱり人生の転機が来ます。

パートナーが見つかった。その御両親にも会いに行かなくちゃいけないし、パートナーに自分の両親も紹介しないといけない。親父やおふくろどうしているかなと、あの仕事どうなんだろうというのを考えますよね。その時30歳ぐらいになったら帰れるように、私は「30歳になったら静岡県」運動を今やっているんですよ。

今のお話のサテライトオフィスですね、すばらしい考えだ。これは成功しているところがありますよ。川根本町という、もう東伊豆どころじゃないですよ。高校も川根高校というのは30~40人しかいません、3学年全部合わせてですよ。そこに横浜に本拠地のあるゾーホージャパンというインターネットの会社があるんですよ。そのオフィスがランチを持ちたいと、サテライトオフィスを。空いているところがないか。駐在所が空いていた。それをお借りになったんですよ。

どうしてかというと、ゾーホーの社長はインド人で、アメリカに渡って、シリコンバレーで大成功して、自ら会社を興して、生まれ故郷であるマドラス、今チェンナイというんですが、そこで大成功して、そして自分のところで大学までつくっちゃって、それでインターネットで大活躍しているわけです。その人が日本のオフィスを横浜に持った。

たまたま川根本町に来たら、これは天国だ、どうしてこんなところを放っておくのだろうというので、そこをランチに決められたのが2年ほど前です。もっとそれを大きくするというので、今新しい建物をつくろうとされております。

そしてそれだけじゃありません。川根高校の学生を全部自分の大学に留学させてやるというわけです。そこで、インターネットと英語の教育をしてあげると。今4人ぐらい行っています。4人で少ないと思いますけれども、30~40人の4人ですから1割が行っているんです。どうしてかという、川根本町に光ブロードバンドが来ているからなんです。

さあ、賀茂地域に来ていますかね。それがすごく大切に、初期投資かかりますけれども、9時から勤めて5時というサラリーマンの生活は大正時代からです。それ以前は基本的に家で仕事していたわけですね、職人さんも、農業をする人も。そういう時代だったのが、突然、長男坊は家を継ぐけれども、次男坊、三男坊は都会に出かけて行ってサラリーマンの生活をする。

今は長男坊も全部出ていくようになって、それが当たり前みたいになっていますけれども、今こういう情報の時代になって、別に会社に行かなくても、家にいながら仕事ができる時代になってきています。ですから、そういう新しい潮流を傍聴者2さんはよく御存じで、サテライトオフィスは可能です。

だからサテライトの大学のランチも可能ですね。ですから、そのためにはまずインターネットのインフラですね、これをやっぱりやらないといけない。こちらよりもはるかに小さい川根本町というところが、あそこは島田というところと合併しよう、嫌だと言ったわけです。極めて財政的に厳しいですよ。

そこが光ブロードバンドで、町を二分する町長選がありまして、入れると決まっていたので、入れた途端に突然そういう話があった。こんな自然が豊かなところで、かつそんなに不便ではないと。人々はいいし、ちゃんと高校もあるし、大学はうちでやってやるということでやっているわけです。ですから、こちらも一度そういうのを見に行かれるといいと思います。

今傍聴者2さんがおっしゃったのは税制のことですけれども、税制は国の税制と連動しないといけませんので、そう簡単にこちらがというわけにはいかないところがあります。いろいろな優遇措置をしていますので、企業誘致の活動の結果、製造業などの企業立地件数では、去年は95件、日本一です。一昨年74件、これも日本一ですね。だからどんどん来ています。

やっぱり景色もいいし、東京とのアクセスもいいし、子どもたちを育てるのに自然も豊かだし、食べ物もいいし、美しいところだということであられる人は増えているんですが、この地域にもそういうサテライトオフィスみたいなものを考えるということであれば、こういうICT、インフォメーション、コミュニケーション、テクノロジー、こういう技術を使って仕事をする時代になっていますので、子どもたちにもそういうものを教えなくちゃいけませんし、教える人材が今十分ではありません。いろいろしなくちゃいけないことがある。問題点だけ申し上げましたけれども、そういうことがこれから起こっていくということですね。

実は河津町長さんも、東伊豆町長さんも、こちらの例えば市民農園があるじゃないですか。あれ大成功でしょう。

仮にビルで30階のマンションに住んでいるとして、30階が一番高いですよ。そこは窓を開けたら、洗濯物干せると思いませんか。ビュービュー風が吹いて、洗濯物なんか干せないですよ。そういうところだから、窓を開けられない。だからエレベーターで下に降りて、外に出たらわか雨が降っていたというふうな、そういう生活。

そこで子どもが育つと、コンクリートの生活ですから、虫を見たり、草花がそこに咲いているのを見ることはありません。ですから、山村留学が起こっているんですね。そういうところで育ったお子様をもう少し緑豊かなことを経験させたいと。

だから実は東京駅降りてくださいませ。丸の内側にビルがある。ビルに木が生えているじゃないですか。側面を緑化したりしているじゃないですか。緑に飢えているんですよ。だから今、緑への回帰が起こっている。こちらは緑そのものじゃありませんか。「海と山の風景の画廊」です。

ですから、これから私は東京の時代じゃないということで、ポスト東京時代を開きたいと。しかも世界クラスが、富士山が世界遺産になった年は、天から3つ降ってきました。翌年は9つ降ってきました。平成27年には11降ってきました。28、29年は20件ずつぐらい降ってきて、今年もう既に16件、平成25年6月に富士山が世界文化遺産になってから、わさびが世界農業遺産、伊豆半島がユネスコ世界ジオパークになって、80件あります。これは金メダル取った人も入れていますけれども、5年と6カ月ですよ。平成25年6月から、今平成30年の11月末ですから、5年と6カ月。つまり66カ月で80件ですよ。1カ月に1件以上の割合で世界クラスが降ってきているところです。

ノーベル文学賞を日本で最初にとった川端先生は、ここが「海と山の風景の画廊」だと。つまりこれ自体が世界の宝物とだと、その時にもおっしゃっていました。だからそういう檜舞台で生活を今しているんですね。あなた方は世界の檜舞台の県なんですねということが、その資料で示されているということですから、これから田園回帰が起こると思います。ここは天国なんですよ、言ってみれば。違うでしょうか。

以上でございます。